

# 田尻だより

平成 19 年

8月 号

Vol. 53

次回の田尻便りは  
9月発行予定!

暦はもう八月を迎え

ましたが、依然として

梅雨明け宣言がされて

いません。6月から真

夏並みの気温になりま

したが、その後は思っ

たほど気温も伸びず、

周囲ではイモチ病の心

配をする農家も出てき

ました。

早く暑い夏がやってき

てほしいものです。

〔田んぼの生態系〕

私達のお米作りは、

自然との調和を目指し

ています。けれども、

その内容が分かりにく

いと感じる消費者の方

も少なくないようです。

例えば合鴨あいがも農法や鯉コイ

農法は、个性的でとて

も面白い取り組みです。

けれども雑食性の合鴨

や鯉は、稲以外の色ん

なものを食べるため、

意外と田んぼの生き物

は少ないです。

一方私達は、田んぼ

生き物調査のとき、  
積極的なこころお姉  
ちゃんと一緒にだ、

お姉ちゃんが  
買ってきてあげてくれたよ!



ちょっと消極的なさくらですが、

消極的なやまと一緒に  
だ、何故か積極的。

こーやって  
取るんだよ、  
分かった?

見てるだけで、  
+分  
楽しい



そして  
服を脱ぐ  
(長靴も)。

子供って面白い。

豊かになれるのです。

初めて、日本の農業は

種多様な農業があつて

初め、それぞれの夢と意

義があるからです。多

をお米を作る場所だけ

ではなく、トンボやカ

エル、ドジョウなど、

色んな生き物の生活空

間だと考えます。田ん

ぼには田んぼの生態系

があり、それを守るの

も農家の仕事だと、私

達は取り組んでいます。

農業に正解はありま

せん。それぞれの農法

にはそれぞれの夢と意

義があるからです。多

種多様な農業があつて

初めて、日本の農業は

豊かになれるのです。

## 嫁日記

5月に田植えの取材に来てくれた田尻中学校の子達の記事が、7月に地元の新聞に掲載掲載されました。一生懸命まとめた内容が、何ともほほえましい記事です。

その後、保育園の先生に、新聞に載ってたのはさくらちゃんのママですよ?と

聞かれたり、農家のおっちゃんに新聞載ってたなと言われたりと、意外と地元紙でも皆さん見ている、うれしはずかし新聞デビュー。

でも本当に嬉しかったのは、取材後にももらったお手紙の「農業も面白いと思った」、「好きじゃなかった田尻の田んぼが好きになった」という素直な感想なのでした。

## 未 暦 ~こめごよみ~

7月1日~ 草刈りをしました。

7月日 田んぼの生き物調査を  
~29日 しました。

強い日差しの中の農作業で、皆、日焼けで真っ黒になっています。今年の生き物調査は、農家の大人達ばかりではなく、子供たちも一緒に参加する機会が増えました。来年はさらに大人も子供も一緒に遊び、学べる生き物調査にしたいです。

※イモチ病。冷夏の年などに多発しやすい。低温や多湿で発生しやすい。

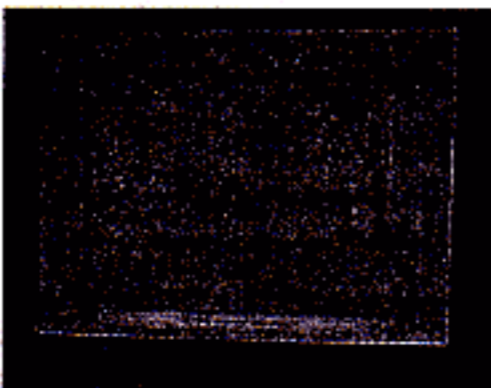
NIE  
Newspaper In Education  
毎週日・水曜掲載



# 田尻中

学校名 大崎市立田尻中学校  
所在地 大崎市田尻沼部早稲田15  
校長 伊藤 延夫  
生徒 341人

田尻中の学習の手引「どくび」の表紙



## 自慢の土偶

わたしたちの住む田尻は、たくさんの自然のほかに、素晴らしい歴史が息づく地域です。中でも一番有名なのが、1943年に恵比須田遺跡で発見された「遮光器(しやこうざ)土偶」です。肩幅20センチ、高さ36センチの日本最大の土偶です。実物は東京国立博物館に展示されています。「どくび」という愛称で旧田尻町のマスコットキャラクターとなり、マンホ

縄文のロマン  
香り立つ古里



「どくび」の愛称が付いている遮光器土偶

ルのふたや広報誌などで見かけます。田尻中でも「どくび」は、「学習と生活」の手引の名称になっています。これは、生徒一人一人が充実した学校生活を送るためのものであり、地域に根ざした学校にしようという願いが込められています。土偶が発見された縄文土マンあふれる田尻は、わたしたちの誇りです。  
文・小原武、阿部晶、嘉登睦(2年)

## 環境配慮し米作り

「雁音米」の誕生は平成五年の冷害がきっかけでした。田尻も冷害被害がひどく、当時講演会に招いた先生に言われた「田尻で越冬するようになる「耕さない米作り」

でした。生き物のために水田を湿地に戻したことで初めは採集のために飛来していたガンが田尻で越冬するようになった。そこで、

「雁音米」作りを取り組んでいる雁音農産開発有限会社で水田企画を担当する小野寺ひかるさんにお話を伺いました。



わたしたちが住む田尻地域は稲作が盛んです。学校の周りには一面に田園風景が広がっています。平成十七年に無農薬とその周辺水田がラ・サール条約登録地に登録され全国から注目されると同時に、国際的な保護保全の対象になりました。現在、農薬のおかげで虫やばい菌に悩まされず安心して米作りをすることができるようになりました。無農薬にこだわ

雁音農産開発有限会社 水田企画担当 小野寺ひかるさん

# 生き物と共生する田



農業の楽しさについて生き生きと説明してくれた小野寺さん(左端)

までも雁の音が聞こえる田んぼでありたいという願いを込めて「雁音米」

語ドイツ語です。「生き物が生息できる特定の空間」のことで、ため池や田んぼそのものもひとつです。普通、集場所になると冬の間には水はあまりありません。冬の田んぼは排水口を開けてしまうから冬の間は排水口を閉めておくので、雨水がたまり、それによって田んぼ

には多くの生物が生息し、田んぼの環境が豊かになっていくのです。田植えをしながら、生き物探しに夢中になることがよくあるんですよ」と小野寺さんは笑顔でおしゃっていました。

「雁音米」は消費者の元へ届けられ、消費者も関東地方などから小野寺さんの田んぼを買いやって来るそうです。

小野寺さんは、生き生きと田んぼの生き物について説明してくださり、農業の楽しさや農家の良さが少しでも伝わればとおっしゃいました。わたしたちは農薬によってその土地から人が離れてしまっているように思っていました。都会の人は、農業によって、その土地に人が集まる場所になると冬の間には水はあまりありません。冬の田んぼは排水口を開けてしまうから冬の間は排水口を閉めておくので、雨水がたまり、それによって田んぼ

文・斎藤拓哉、猪股美結、笠原夢美(3年)

## 生徒の健康作る146歳の長い廊下

わたしが田尻中の自慢は、長い廊下です。その長さは何と直線で一四六・五メートルあります。この長さは、つい最近までわたしたち生徒も知らなかったのが驚いています。こんなに長い廊下は全国的に見ても多くはないでしょう。

しかし、廊下が長いということは教室を移動す

るのが大変です。一日のうち二階から三階まで歩き回ることも多く、わたしたちは常に遅れずに移動するように心がけています。長い廊下のおかげで田尻中生の健康な体がつくられていると言ってもいいかもしれません。

現在、田尻中は耐震・大規模改修工事中。半分の校舎での生活は少し窮屈ですが、夏休み明けからは改修された校舎、そして長い廊下が復活するのでとても楽しみです。これからもこの校舎を大切に使い、後継に受け継いでいきたいと思います。

文・高橋まどか、佐々木真美(3年)

